

郷土の 偉人

機械製糸業の草分け 多勢長兵衛と多勢亀五郎

多勢長兵衛（幼名：喜代吉）は天保3年（1832年）に、亀五郎は嘉永2年（1849年）に、それぞれ酒造家だった三代目・多勢長兵衛の長男、三男として漆山に生まれました。

2人が成長する頃は、日本がようやく外国と貿易するようになった時代で、その頃の日本の最大の輸出品は生糸（絹糸）でした。生糸は、蚕を飼育して繭を作らせ、繭から糸を取り出したもので、絹織物の原料になります。

当時の置賜地方は養蚕・生糸の生産が盛んでしたが、手作りのため品質にむらがありました。一方、輸出相手の欧米諸国は機械産業の時代に進んでいましたので、品質が一定した生糸が求められました。

品質一定の生糸を生産するためには、機械生産でなければなりません。日本政府は、明治5年（1872年）、機械製糸の技術を伝習させるため、官営の富岡製糸工場を群馬県前橋に建設し、日本全国から女子工員を募集しました。

このような動きを察知した長兵衛と亀五郎は、早速、富岡製糸工場などに出張し、苦勞して先進技術・機械などを学びました。「教えてください」と土下座して頼んだりもしました。

明治6年（1873年）には製糸機械と技術者を連れ帰り、南陽市漆山に初めての機械製糸工場を建設しました。機械製糸は初めての事業なので、最初は失敗の連続でした。しかし、2人はそれにめげることなく研究を続け、優良な生糸を生産できるようになったのです。

2人は地域の発展のため、他の事業者や工員にも技術を教えました。一時期は置賜に100を超す製糸工場ができたそうです。一方で2人はますますの品質向上を目指し、「多勢組」という組織を作って皆で研究しました。その結果「羽前エキストラ」という極上品を生み出し、海外で好評を博したのです。

また、亀五郎が設立した「金上製糸工場」は発展をとげ、昭和初期には山形県一の製糸工場に成長しました。その後、亀五郎は大いに国に貢献したとして貴族院議員にも選ばれました。



多勢亀五郎の肖像画

（寒河江博さん所蔵）



●多勢長兵衛を称える「殖産益国の碑」

文・須崎寛二

平成24年10月1日号 市報なんよう掲載